社団法人 日本自動車会議所
会議所ニュース
Automobile Business Association of Japan

「明日はわが身？　急増する窃盗犯罪とその対処法」――松村エンジニアリング・松村喜秀社長が講演

第104回会員研修会開催

日本自動車会議所は5月25日、東京・港区の日本自動車会館「くるまプラザ」会議室で、第104回会員研修会を開催し、(株)松村エンジニアリングの松村喜秀社長が「明日はわが身？　急増する窃盗犯罪とその対処法」と題して講演を行った。一時は沈静化しつつあった自動車盗難事件がこのところ急増しており、その対策は急を要している。しかも、高級乗用車だけでなく、大衆車までもが犯罪の標的になっており、100台に1台が盗難被害に遭っているとのデータもある。自動車盗難以外にもクレジットカードやキャッシュカードのスキミング、ピッキングなど、国民生活は常に窃盗犯罪の危険にさらされている。そこで、偽(にせ)札鑑別の世界的な権威として知られ、犯罪の実態にも精通している松村氏に、国民の平穏な生活を脅かす“身近な犯罪”から身を守る方法を披露してもらった。参加者は約60名。

実際にあった話である。ある女性会社員が銀行で預金残高を確認したところ、あるはずの2,800万円がなかったという。この女性はキャッシュカードや通帳、印鑑などを盗まれた覚えがなかったが、キャッシュカードによって毎日50万円ずつ引き出されていた。マンション購入資金としてコツコツと貯めていた大切な預金は、40万円ほどしか残っていなかった。偽造カードによって引き出されたことを知った女性は、その場で泣き崩れたそうだ。

松村氏は、「こういう人がもの凄く増えている」として注意を呼びかける。本人のまったく知らないところで犯罪が行われているというのだ。というのも、技術の進歩によって、個人情報がたやすく手に入りやすくなったからだ。

例えば、男性の胸や尻ポケットに仕舞われた財布。多くの人は財布の中にクレジットカードを入れているが、カード型のある機器を使えば、ほんの一瞬、目星を付けた人の胸やお尻付近をスキャニングするだけでクレジットカードやキャッシュカードなどのデータを盗むことができるという。女性の場合も同様に、ハンドバッグに近づけるだけで個人データが手に入る。1週間ほどかけて盗んだデータの解析作業を行わなければカードの暗証番号などは特定されないが、データを盗まれた本人に盗難に遭ったとの自覚がないため、手遅れになるケースが多い。

絶対に安全と言われていたICカードでさえ、今やパソコン20台を駆使するとデータを盗むことが可能だという。こうした犯罪には外国人が関わっている場合が多いが、高い学歴や専門的な技術力を有する者も少なくない。中には軍隊で特殊技術を身につけたスペシャリストもいるという。松村氏は、「泥棒をバカにすべきではない。高いレベルの知識や技術を持った人たちであるということを認識していないと、大きな犯罪に巻き込まれることもありうる」と警告する。

松村氏が犯罪の手口や犯罪者に詳しくなったのは、創業間もない頃の苦い経験が発端だったという。

得意のセンサー技術が評価され、同社はソウルオリンピック前年の1987年、大手商社から偽札鑑定機の製造依頼を受けた。韓国へ約2,000台も輸出するなど新規事業は好調にスタートしたかに見えたが、「3、4ヵ月でパタッと売れなくなった」という。同社製の鑑定機をすり抜ける偽札が現れたのだ。

そこで松村氏は、すぐさまベトナム、ミャンマー、カンボジアなどの東南アジアに飛んだ。最新の偽札を手に

入れるためだ。犯罪者の巣窟のような地区の宿を拠点として、毎晩、マフィアのボスたちと飲む毎日を送った。それから半年後、ようやく4枚の100ドル札を入手。精巧に製造されたそれら偽札の鑑定結果を発表すると、海外のマスコミから大きな反応があり、『ニューズウィーク』誌で特集も組まれた。「偽札の鑑別機を作るためには、偽札を作る人間に接しなければならない」という。

この主義は他のセキュリティー機器に対しても同様で、殺人を犯していない服役中のカギ破り名人を紹介してもらい、刑務所を訪ねるなどして親身に世話をするという。出所すると自社製品の“機器破り”を依頼する。製品開発は犯罪当事者の実体験に基づいているだけに、優れたセキュリティー機器作りが可能となった。こうして蓄積された知識や技術、人脈などが評価され、米FBIやCIA、韓国KCIAの各顧問、日本の警察大学講師を務めるなど、捜査機関の信任も厚い。最近では米シークレットサービスの会議に招かれたばかりだ。

その松村氏によると、海外での日本車需要が高まるにつれて、新手の手口を使った自動車盗難事件が急増傾向にあり、その対象は大衆車や軽自動車にまで広がっているという。しかも、「受注を受けてから盗むというのが主流になっている」という。車種、年式、色だけでなく、シートが革張りかどうかまでの指定を受けてから窃盗団は実行に移るのだ。そして、受注から1時間以内で注文どおりの車を盗み、その日のうちに海外に送り出す。この早業は、中国人マフィアなど外国人窃盗団のネットワークと、日本の暴力団との連係プレーによるところが大きい。

犯罪の手口も高度化しており、トランクの鍵穴から複製品を作るというのは一昔前の話で、最近は車内に置いてある鍵、さらには鍵穴までをもカメラ付きの携帯電話などで撮影し、スペアーキーを作ることも珍しくないという。

犯罪防止効果が非常に高いとされるイモビライザーでさえ、窃盗団の手にかかると無力化しつつある。松村氏によると、「イモビライザーは、エンジンキー側のIDコードと車両側のIDコードが一致するとエンジンが掛かる仕組みだが、窃盗団から委託を受けたソフト屋や開発屋が何重にも掛けられたスクランブルをすり抜けて、IDコードを解析するプログラムを開発している。そのプログラムによって、鍵穴に、ある機器を差し込んでIDを吸い上げ、それをコンピューターで解析して複製キーが作れるようになった。この機器セットが8万円以下で売られている。極端に言えば、すべてのベンツのドアが開くキーが8万円で売られているのと同じ。車の鍵を盗んでエンジンを掛けるような犯罪グループは、もういない」という。

では、大切な愛車を窃盗団から守るにどうすればいいのか。トランクの鍵穴を塞いでおくのは当然として、基本的には「泥棒が嫌がることをすること」だという。「安くてもいいので、セキュリティーグッズを付けておくこと。車を勝手に動かしたりドアを開けたりしたら、クラクションが鳴ったりライトがついたりするものがいい」のだそうだ。

ただ、このところ運転席に人がいても構わず襲撃し、人里から離れたところで運転手を降ろして車を盗むという荒っぽい犯罪もチラホラと発生し始めている。実際、千葉県木更津市で信号待ちをしている車が襲われた。松村氏は、「車に乗ったら、必ず鍵を掛けてください」と警告している。

クレジットカードやキャッシュカードにしても、小まめに暗証番号やパスワードを変えることが最大の防止策のようだ。預金通帳については金額の大きなものはキャッシュカードを作らず、よく使う通帳にだけある程度のお金を入れておき、リスクを最小限に抑えるべきだと松村氏は話している。

チームを組んだプロの犯罪集団から平穏な生活を守るのは大変なことではあるが、小さな積み重ねが大きな犯罪から自分や家族を守ることになることだけは間違いないようだ。